

スピリチュエルなアンガージュマン

— フランス・リール市ワゼム地区における
社会的アソシエーションの聞き取り調査の記録から —

辻 山 ゆき子

1 リール市ワゼム地 — 中心性と周辺性の共存

2014年11月からリール市ワゼム地区で「活動的連帯の枠組みにおける、ワゼム地区のアソシエーション活動にみるアンガージュマン——」*l'engagement dans le cadre de la solidarité active et aux activités des associations du quartier Wazemmes.*というテーマの下で、いくつかのアソシエーション代表者と職員に、一連のインタビューを行った。本稿では、そのひとつ、「AIDA 難民申請者の支援と社会参加」という団体の責任者の語りを分析したい。インタビューを紹介、分析する前に、まずノール・パドカレ地域圏の中心都市のリール市の特徴を述べたい。

第一に、リール市からベルギー国境に掛けて市街地が切れ目なく国境をまたいで続いている国境の町である。その影響圏が国境を越えて及んでいる例としては、ストラスブルなどもあるが、市街地が延々と続いているのはリールだけだという（高橋伸夫・手塚章，2003年，p.67）。

第二に、フランスにおける周辺性とヨーロッパにおける中心性の共存である。イギリスの首都ロンドンから240キロ、フランスの首都パリから200キロ、EUの実質的な首都ブリュッセルからは100キロ足らずとヨーロッパ有数の大都市との距離が非常に近い。フランス国内では周辺にあるが、ヨーロッパ全体のなかでは中心にある。このような、地理的特性を背景に、EU統合の進展により、リールはその中心性を活用するためにさまざまな再開発を1980年代から行っている。1988年の新オフィス地区Euralilleの建設、1993年の新幹線TGVの開通¹⁾。さらに、1994年にユーロスターが開通して、文字通りパリ、ブリュッセル、ロンドンを結ぶヨーロッパの十字路に位置するようになった。また、2004年には欧州文化首都に選ばれ、リール市の再開発に弾みがついた。リールの町並み、地名、食文化、人々の気質などあちらこちらで感じられるフランドル文化は、フランスにおける周辺性とヨーロッパにおける中心性の象徴である。

第三に挙げられるのは、リール市を取り巻くノール・パドカレ地域圏の貧困である。産業

革命以降、繊維産業と炭鉱業で栄えた工業地帯だったが、1970年代から1980年代の不況によって衰退した。2012年フランス本土のなかで生活水準がもっとも低い地方である。半分の人々が年間17,700ユーロ以下で暮らしている。77万人近く、人口の19.3%が貧困線以下で暮らしている。つまり、この貧困率はフランス本土全体14.3%より5%高い。コルシカ地域圏(20.4%)、ラングドック・ロシヨン地域圏(19.8%)について3番目に貧しい。ノール・パドカレ地域圏はフランスの中でもとくに、ひとり親、若い人、5人以上といった世帯が貧困状態にある。都市中心部、また、かつての炭田地域で貧困が顕著である(Lecomte & Benoit, 2015)。2013年から2015年の失業率は約13%を推移しており、フランス本土全体(10%)より高い(INSEE, 2015, 93)(INSEE, 2015, 1012)。

第4に、多くの外国人労働者を受け入れてきた歴史的経験が挙げられる。ノール・パドカレ地域圏は国境に位置し、鉱工業が盛んであったために外国人の流入が顕著にみられた。19世紀から第一次世界大戦までのフラマン系ベルギー人の流入、1920年代から1930年代のポーランド人やイタリア人、第二次世界大戦後の北アフリカのアルジェリア、モロッコ、チュニジア、さらにはブラック・アフリカから多くの外国人労働者がノール・パドカレ地方にやってきて、地域の産業を支えた。

このようにノール・パドカレ地域圏には、明らかな貧困や国境地帯といった周辺性と、ヨーロッパ・スケールでの地理的な中心性、様々な民族を受け入れてきたかつての経済的な中心性がある。

ノール・パドカレ地域圏の首都リール市ワゼムという地区は、リール市の中心部近くに位置する。活気のある労働者の町として知られたが、1970年代、1980年代は衰退と荒廃が顕著になった。失業率が高く、困窮都市地区(Zus : Zones Urbaines Sensibles)にも指定されている。しかし、現在では移民のもたらした北アフリカのマブレブ文化の影響を受け、新しい文化・芸術の発信地として再評価されてきている。火曜日、木曜日、日曜日にワゼム地区の中心、サンピエール・サンポール教会の脇、ヌーヴェル・アヴァンチュール広場で市が立つが、日曜日は毎週4万人ほどの人出があり、町の持つエキゾチックな雰囲気と市場の活気、生鮮食料品の安さ、新鮮さが多くの人をひきつけてたいへん賑わっている。

ノール・パドカレ地域圏と同様にワゼム地区でも、貧しさや民族的多様性に由来する周辺性、一方で、様々な民族や階層の人々が集まる中心性が共存している。

2 聞き取り調査

2-1 AIDA 難民申請者の支援と社会参加 — 現場性の強調

AIDA (Aide et Insertion des Demandeurs d'Asile 難民申請者の支援と社会参加)⁽²⁾は、困窮状態にある外国人、主に難民申請中の人々の社会参加を支援しているアソシエーションである。聞き取りに訪れた際に入手した活動報告(AIDA, 2014)によれば、この団体はフ

ランスに到着したばかりの難民申請者の生活を支えるために、2003年にエマウス Emmaus⁽³⁾によって設立された。ノール県とパ・ド・カレ県のエマウス共同体が、社会的、法的、行政的側面から難民申請者支援の必要性を感じていたのである。AIDAの事務所は、ワゼム地区の南側ジュスティス通りにある。2002年11月ノール・パ・ド・カレ地方のエマウスは、AIDA開設のために2人の職員を出向させ、まず、支部のかたちで、困窮状態の外国人の食事、洗濯、シャワーの緊急対策を行った。AIDAが正式に設立され、定款がノール県庁に提出されたのは、2003年1月である。責任者ともう一人の職員を雇用して、2人体制でスタートを切った。同じ年に、AIDAは、郵便物の預かり domiciliation postale の認可も受けた。

サービスは少しずつ発展していった。2004年は、まず、識字教室が作られた。2005年は、庇護権全国裁判所 Cour Nationale du Droit d'Asile⁽⁴⁾への訴え担当として法律家、エブルー・ブーエルクメン Ebru BUE ERKMEN さんを雇った。2006年、AIDA事務所に住んでいた初代の責任者が退職し、その住居を利用者の休息室に変えた。彼の後任は、法律家のブーエルクメンさんが引き継いだ。

2007年夏にリールで滞在正規化を求める不法滞在者の70日以上に及ぶハンガーストライキがあった。その年の9月に県知事と不法滞在外国人を支援する複数のアソシエーションとの交渉の後、外国人行政状況再審査県諮問委員会 (la commission consultative départementale de réexamen des situations administratives des étrangers) が設置された。AIDAも滞在正規化を求める外国人支援団体として、この諮問委員会への参加を認められた。これはノール県独自のもので、参加しているアソシエーションが、申請を拒否された難民の書類を一つ一つ示して、例外的な正規化を要求する⁽⁵⁾ (Le préfet installe sa commission sans-papiers, 2007) (Cette France-là) (DUTHOIT, 2010)。外国人行政状況再審査県諮問委員会への参加はAIDAの外国人の滞在の正規化を求める活動が、公的に評価されたことを示している。2007年は、ソーシャル・ワーカー assistante sociale を雇用し、外国人の幅広い必要に答えようとした。2008年、AIDAはノール・パ・ド・カレのエマウス共同体から独立し、一つの団体としてフランス・エマウス運動に加入した。このことは、AIDAの存在を全国的に知らせるだけでなく、国境の町リールにおける外国人支援活動の必要性も示すことになった。2009年、フランス語講座の運営のために特別教育教員 éducatrice spécialisée の国家資格者を採用した。それによって、外国人がフランス語学習を通じてフランス社会に参加するということも、フランスの市民的教育手続きの中にあることを示すことができた。活動報告書では述べられている。

AIDAは職員2人から始まった小さなアソシエーションだが、設立以来、順調に発展してきているように見える。AIDAの2014年版の活動報告書では、人々の要求にその場ですぐに応じて来たからだと言われているが、そのような現場の必要に応じて活動を広げて来た具体例として、2010年の荷物の一時預かり所の創設がある。

フランスに入国した難民申請者の中には、落ち着いた住居を見つけられず、絶えず場所を変えなければならない人々がいた。私たちの最初の応えは、緊急に、まず彼らの荷物をしまっておく部屋の解放だった。すぐに、私たちは、多くの人々から頼まれて、きちんとした一時預かりのサービスを始めることになった。一部屋を改装して、荷物には全部に荷札がつけられ、開室時間がきまった。(AIDA, 2014, p. 5)

AIDA の活動報告書からは、このような現場性の強調が読み取れる。

2013 年、職員は 6 人いる。特別教育教員は、フランス語講座を担当し、ヴォランティアのフランス語教師の調整をする。ソーシャル・ワーカーは、家族のフランス社会への定着の支援と子どもの就学支援を行う。とくに、利用者が社会的権利を行使できるように支援する。法律家は、庇護権全国裁判所に出す訴状を書き、利用者とエマウスの仲間が、行政的法的な手続きを行う際に同行する。経理・管理係は、利用者の最初の必要（給食、洗濯……）に応えつつ、アソシエーションのサービスがきちんと機能するよう、建物や設備の保守、メンテナンスを行う。ケース・ワーカー *travailleuse sociale* は、入会登録の際の最初の面会で、オリエンテーションを行う。

2-2 AIDA 代表エブルー・ブーエルクメン

2015 年 1 月 20 日、1 時間あまり責任者のエブルー・ブーエルクメン Ebru BUE ERKMEN さんに、AIDA 事務室でインタビューを行った。ブーエルクメンさんは 38 歳の女性で、トルコのイスタンブール生まれ。母語はトルコ語、フランス語は第一外国語だった。フランス・リール市のリール第二大学に留学し、リール第一大学で修士課程を終え、そのままフランスで就職、結婚した。現在、物理学の博士号を持つ夫と子ども 2 人の 4 人家族である。夫も彼女とおなじようにアソシエーションの職員で、リールに近いサン＝タンドレ＝レ＝リール市の「希望の山小屋 *les Chalets de l'espoir*」で働いている。社会問題に関わるために物理学の研究者としての仕事は辞めたという。ブーエルクメンさんは、2 人の子どもが生まれた後、2 回育児休暇を取ったが、トータル 2 年の育児休暇をのぞいて、ずっと働き続けている。若々しく、エネルギーで、たいへん明るい印象を受けた。インタビューに同席したのは、リール第二大学のアブデラフィド・アムシュ Abdelhafid HAMMOUCHE 教授と私である。以下、インタビューの文字起こしをたどりながら、その内容を分析したい⁽⁶⁾。

2-2-1 難民申請者の生活と将来を包括的に支援する道

私は、大学で学ぶためにフランスに来ました。リール第二大学に入学し、法学を学び、公法の学士号をとりました。その後、リール第一大学で国際開発協力の、DESS [修士課程] に入りました。

私は、とても「この分野に」関心を向けていたので、最初から必ずしも開発協力「の課程」に合っていませんでした。DESSの終わりに実習に行かなければならないのですが、先生方は私を開発協力に向けようとしたのですが、できませんでした。私は、ずっと外国人難民申請の問題に関心があったからです。それで私は「レバノンの」ベイルートの外国人収容所、非正規状態の外国人の収容所へ行きました。「私の関心は」まったく開発協力にはありませんでした。私は、自分がどこへ行きたいのか知っていました。結局、私はDESSをあまり良い点で合格はしませんでした。でも実習の終わりに、「自分の道が見つかった。この人たちの傍で働きたいのだ」と思いました。外国人収容所については、「ちがう、外国人収容所ではない、私は、法的闘争をするだけでなく、人にたいしてもっと包括的なアプローチをしたい」と思いました。「活動の場が」外国人収容所だけではあれば、目の前には国境で追放されようとしている被収容者、外国人収容所に入れられた収容者がおり、その人を外に出すために法的闘争に入ることになるのです。で、私が欲求不満になったのは、そのあと彼はどうなるのだろう、生活や将来の計画はどうするのだろうということです。ですから、外国人収容所ではなく、「私の働く場所は」むしろその外だと思いました。ですから、帰るとCIMADEというアソシエーションに入りました。

こうして、ブーエルクメンさんは、難民申請者の生活と将来を包括的に支援する道を求めた。2001年にパリでCIMADE (Comité Inter-Mouvements Auprès Des Evacués) というアソシエーションに就職した。これは、第二次世界大戦中の1939年に設立された歴史のある外国人支援団体である。

このアソシエーションは、プロテスタントの人々によって、ユダヤ人を助けるために第二次世界大戦中につくられました。でも、私はそこでも「私にはもっと人道主義的な側面も必要だ」と思いました。法的闘争や滞在許可だけしかないのではなく、問題はつねに「で、そのあとは？」将来の計画でした。そして、私はここ「AIDA」に来ました。とても面白いと思いました。

CIMADEは、難民申請者を法的に支援する有名な歴史のある団体だったが、ブーエルクメンさんの目指す「生活と将来を包括的に支援する」というものではなかった。そして、そうした活動の可能な、できたばかりの小さな団体に出会ったのである。ブーエルクメンさんは、2005年にリールに来て、AIDAに就職した。

AIDA、庇護を求める人々への社会参加と支援。私たちは、職員2人でした。することはたくさんありました。基本的なサービスはありましたが、私には、十分に多方面の

専門家が揃っていると思えませんでした。ソーシャル・ワーカー、特別教育教員、法律家、それは私でしたが、不十分でした。現在は、ちなみに私たちは7人になりました。

2005年に私に来たときには、2005年5月に法律家として雇われたのですが、そのときには、責任者一人と、法律家が一人ということでした。責任者は出て行き、「あなたも少しやりなさいよ」と言われて、結局、「あなたが責任者になりなさいよ」と言われました。

(いつから、責任者になったのですか)

2007-2008年度です。

少しずつです。お金ができれば、雇う。だいたい毎年一人ずつ [職員を] 増やすことができました。

(彼らの地位は、無期限労働契約 CDI ですか)

はい、全員ではありませんが [職員の地位は CDI 無期限労働契約です]。でも、さっきご紹介したモモは、参入契約⁽⁷⁾ から始めて、期限付き労働契約 (CDD) に変えて、そして無期限労働契約 (CDI) に変えました。役所の倫理観、考え方には、傷つきます。公共職業安定所 Pôle Emploi などが私たちに財政支援をしているのですが、「お金はだしましょう。参入契約で雇ってください」と言います。でも私は「もし、私がなにも先の見通しがなかったら」と思います。私は、きつととても心配性だと思います。倫理的にあって、私はその人と「将来なにをしようと思っているの？ 職業経験認定の書類？ それとも大学入学資格試験を受けたいの？」と話をしなければと思います。「ほら、援助契約をしましたね、じゃあ、さよなら、終わりです」では、ないと思います。

ブーエルクメンさんのこの言葉には、初志一貫して、人の生活と将来への包括的な関心がある。それは、支援対象者だけではなく、職員として AIDA で雇用する人たちにたいしても同じである。

(「AIDA とは何でしょう」と聞かれたら、どのように答えますか)

受け入れです。比護申請者の日中の受け入れです。このビジョンを示したとき、私たちはこの町に歓迎されませんでした。

2002年、この活動はエマウス運動に帰属していました。私たちは、ここの大家ではありません。でも、エマウスはホールディングというか、この活動の親団体です。エマウ

スが企画をたて、うまくいか確認するために、独立した組織をつくりました。で、私たちはしっかりとやっています。[エマウスのたてた] 企画とは、つまり会計部のある独立した法人でした。それは、すべてが混ざってしまわないようにするためでもありました。つまり、ここの〔建物〕は、SCI du Touquet というアソシエーションのもので。このアソシエーションは、こんな物件を2, 3持っているのです。運営は、明快です。私たちは、象徴的に、1ユーロの家賃を払います。彼らがこの建物を持っています。なぜだかわからないのですが、彼らが大家です。

2002年、エマウスは地域当局に通知するのを忘れたまま、活動を開始しました。なぜなら、エマウスは自分で資金を調達できるので、ぜんぜん〔公的な〕お金が要らないので、必ずしも窓口申し出る必要はこれまでなかったのです。簡単な手紙を送ればすんでいたのです。住民参加の合議がありませんでした。でも、エマウスは活動を開始しました。そして、それは当局からたいへん悪く受け取られました。その当時「すでに悲惨な地域に、悲惨を連れてくる。すでに困難な地域に、悲惨を引き寄せる」と言われました。

[このように言ったのは] 議員です。彼女に合ったとき、一年前ですが、彼女はこのことを覚えていました。活動内容と比べて、事務所がとて手狭になったので、彼女に会いに行って、「私たちに提供できる事務所はありますか」とたずねたのです。彼女は、[当時の] 出来事をとて良く覚えていました。初めは、私はそれでも「でも私のせいじゃないわ。わたしは、通知したもの」と思っていました。私はちょっと小娘と思われていたのです。私は自分の活動のなかで、政治的なことをあまり気にしていませんでした。私には実現したい計画があり、それを実行したのです。私たちは、この町の住民のことも気がかりでした。とくに中庭を共有している住民が気がかりでした。たくさんの人が、出てきて煙草を吸い、外国語を話します。[こんなことが] 突然に起こったら攻撃を受けたように感じるでしょう。そういう訳で、私たちにはたくさんの小さな気がかりがありました。

(もう少し具体的に教えてください。誰かが来て「いいかげんにしろ！」と言ったのですか、それとも警察に訴えたのですか?)

市役所にいくつか陳情書が出されました。それから、いろいろな攻撃もありました。だれか戸の前に吐いた人がいて、私たちが行って掃除をしました。近所の女性が入り口でひっくり返された大きな水の入っていたバケツを持って来たので、私たちはすぐに行って掃除をしました。彼女の戸の前でひっくり返したのが、私たちのところにきた人かどうかかわからなかったのですが、でも、掃除をしました。それから、[近所との] 関係は良くなって来ました。

市役所は、それでも私たちを支援してくれました。

ある時、急に計画が閃きました。つまり、2008年だったと思いますが、私は「なにかやろう」と思いました。近所の人を招いて難民申請者たちに会って貰い、私たちのしていることを見て貰いたいと思いました。彼らには、そういう機会がなかったからです。大雑把に言えば、外国人が来るなんだからわからない家で、外国人が怖かったのです。

なにかしようと思って、月に1回、世界の朝御飯をしようと思いました。つまり、いっしょに朝御飯を食べ、それぞれが、たとえばギニア出身のだれそれさんが何か朝御飯を用意して、誰かが自分の国の話をしたり、音楽をかけたり、踊れたら踊り、質問に答え……。こうすれば、交流が生まれます。

(この企画は、だれが対象ですか?)

近所の人です。とても上手く行きました。雰囲気がとても柔らかくなりました。

ここは、難しい地域です。初めはとにかく、私は7時に起きて8時半には朝御飯を食べますが、でも、8時半、9時、10時半、誰も来ません。もう我慢ができなくて、食べちゃいたいと思いました。11時、11時半、やっと人が来ました。郷に行っては郷に従わなければなりません。朝御飯は、ここでは12時頃食べるか、あるいは起こしに行かなければならなかったのです。このやり方に合わせなければならぬのです。

(で、成功したのですね)

はい、はい、はい、和やかになりました。

(近所の人というのは、すぐ近くの人ですか。それとも、事務所からもっと離れた人もですか)

どちらかという中庭を一緒に使っている人たちです。中庭を共有している人たちにとって、私たちはなにより難儀の種でした。彼らがうんざりするのによく分かります。私たちの所に来る人たちは、彼らの家の扉の前にたむろし、気遣いをせず、壁に寄り掛かり、近所の女性が窓を開けたところで煙草をすったりするのです。

朝食という場に守られた、落ち着いた会話の機会が必要だったのです。突然、近所の女性は、おしゃべりをするようになりました。何かがおこりました。「モモに会いに来たわ」「構いませんよ、奥さん」「モモ、お友だちがきたよ!」。近所のべつの人々も、私たちは週末も開いているので、私がいるときにやってきます。

AIDAの入り口に面した中庭を共有している住民との関係は、世界の朝食という企画で良くなった。ブーエルクメンさんは、近所の人々との関係にとっても気をつけており、彼ら

がAIDAを訪れるのを喜んでいる。近所の人といっても、中庭以外のもっと遠い人とは問題がなかったという。世界の朝食という企画には、ブーエルクメンさんの現実的なバランス感覚と、人との交流を求める理想が感じられる。彼女の難民支援という理想と、それを理解しない人々、またそれによって望まない影響を受ける人々への配慮はたいへん現実的である。一方で、難民申請者と近所の人々との交流を求める姿勢は、現実の中に支援の理想を実現しようとしているようにも見える。

2-2-2 活動の時空間の限定性

私たちは、ブーエルクメンさんにとってワゼムとはなにかをたずねた。

多様な文化が混じり合っている (Interculturel), つまり、私にとってはそれがこの町です。多様な文化が混じり合っている (Interculturel) という意味で、この町には多くの色彩があります。

ブーエルクメンさんは、ワゼム地区のポスト通り、カフェ『ル・ポスト』の隣に住んでいる。私たちは、ブーエルクメンさんにとってどこが自分の町か質問をする。

(AIDAのあるジュスティス通りですか)

いいえ、ここは私の町ではありません。私の町は(ポスト通りの)カフェから始まります。そこでは私は外に出ると、お店の人たち、近所の人たちみんなに「こんにちは」と挨拶します。みんな知っているのです。

ブーエルクメンさんは、自分の住んでいるポスト通りからセバストポル通りまでを自分の町だといい、出かけるときにはそこを歩いて通るのだという。また、ワゼム地区のなかで魅力的な場所はどこかを聞かれて、ガンベッタ通りを挙げる。

ガンベッタ通りです。私はガンベッタ通りが大好きです。ワゼムの古い市場、屋内常設市場からサンポール校まで、通りがぜんぶ好きです。

約1.3キロのガンベッタ通りは、ワゼム地区を北東から南西に横切る賑やかな商店街である。小さな個性的な店が軒を連ねている。銀行、雑貨屋、書店、ケバブ屋、カフェ、惣菜屋、洋服屋、菓子屋、パン屋、質の良い品を扱う店が多く、比較のおしゃれな店が目立つ。ガンベッタ通り沿いのヌーヴェル・アヴァンチュール広場はヨーロッパでも有数の大規模な市がたつ。さらに質問を続けて、ワゼム地区には「ここが怖い」という地域があるかとたずねたが、それはないということだった。

さらにブーエルクメンさんは、職場も住居も同じ庶民的なワゼム地区であることの難しさも述べる。

もしご興味があるなら、話したいことがあるのですが。つまり、ポスト通りに住んで、ジュスティス通りで働くのは難しいのです。

(なぜですか)

環境を少し変えたいからです。……そう、環境なんです。問題がついて来るんです。それに、私は町のソーシャル・ワーカーでもあるんです。

ブーエルクメンさんは、以前はポスト通りではなく、ヴォーバン通りに住んでいた。フランスではブルジョワと庶民の階級の違いが比較的はっきりと意識されている。通り一本変わると、ブルジョワと庶民の地域の違いを区別できる。ヴォーバン通りはブルジョワの地域である。夫がブルジョワの地域に住むのが嫌になり、ポスト通りに引っ越したのだが、ブーエルクメンさんにとっては、職場と住居の環境が近すぎて、気持ちの切り替えが難しくなった。

……以前はヴォーバン通りに住んでいました。夫が、[ブルジョワの町に]我慢できませんでした。それで変わりましたが、同じタイプの問題ではありませんでした。

ここでは、ブーエルクメンさんの活動の限定性が示されている。彼女は、AIDAの活動は活動として位置づけ、自分の生活すべてを活動に捧げようとはしていない。自分自身に戻れる時間と場所を確保しようとしている。

2-2-3 個人の間にも生まれる連帯

このインタビューは、「活動的連帯の枠組みにおける、ワゼム地区のアソシエーション活動にみるアンガージュマン」l'engagement dans le cadre de la solidarité active et aux activités des associations du quartier Wazemmes. というテーマの下で行われた、一連のインタビューの一つである。連帯とはなにかという抽象的質問は唐突だが、あえて質問を投げかけてみた。

(あなたにとって連帯とはなんですか)

私にはとても哲学的な質問です！(笑い)私は現場の人間です。単純なんです。

抽象的な質問に、ブーエルクメンさんは戸惑って少し考えてから、次のように答えた。

自分たちで行動できるように、人々にその方法を与えることです。

(でも、すべての人に、ではないですね)

私は、自分の活動をここに限定しています。組織の中の私の哲学です。

(それは、エマウスの創立者ピエール神父の考え方となにか関係がありますか)

結局、いつもそうです。「自らを助けなさい、そうすれば天が君を助けるだろう」。そうすれば、人々は自分で切り拓いてゆくことができるのです。かれらは心配を抱えるかもしれないかもしれませんが、だからこそ一貫性を持つことができるのです。自分自身を建て直そうということなのです。

でも、言葉の端々で、私はきついかもしれません。ときどき人々が「サンタンドレに寮を見つけました。どうやって行くのがわかりません」というと、私は「でも、マダム、あなたはキンシャシャからリールまでいらしたんですよ。リールーサンタンドレがどう行ったらいいかわからないなんて言うてはいけませんよ」といいます。私がしないのは、つまり私にとって連帯とは言えないのは、「たいしたことではありません。連れていってあげますよ、マダム」ということです。連帯するというのは、自分のエネルギーを与えることです。

(では、連帯というのは、よくオーガナイズされた活動ですが、あなたにとっては、オーガナイズされていなくても連帯と考えるのですか。あなたにとっては、連帯とは公的の制度を建て直すようなものではないのですか。AIDA も 1901 年のアソシアシオン法に基づいています)⁽⁸⁾

はい。

(つまり、それは国家ではないのですね。あなたにとって連帯というのは、全員に関わる問題ではないのですね)

たぶん、国家ではないと思います。

(驚きました。というのは、社会保障はまさに連帯の形態ですよ)

はい、でも私は自分のところに来る人々について考えています。

(そう仰るのは、無茶ですね)

私たちの受け取っている補助金ですが、もし、100%国からなら、私はズレているでしょうが。私たちは、県・社会的団結局 directions départementales de la cohésion sociale (DDCS) と、ノール・パドカレ・エマウス・フランスから補助金を貰っています。でも私はバランスをとるようにしています。お金を出す人が命令をし、方向づけます。それが私たちのしようとしていることです。

社会的団結局の2人の視察官を思い出します。彼らは、部屋を見回すと、かれらは自分たちの与えている補助金はヨーロッパの難民申請者のためと思っていたようです。視察

官の女性が、白人と、髪の毛のブロンドの人を認めたときに、「彼らは枠外ですね」と言ったのですが、「たいしたことではありません。彼らはエマウスのラインには入りません」と答えました。つまり、彼らにとって連帯とは……。でも、私たちはそこに困っている人がいるから手を差し伸べたのです。

(あなたも、やはり、制限と手続きがあるというのですね。広げるためには、証拠を示し、手続きを進めなければならないというのですね)

はい、でもそれは私たちにお金がないからです。

(わかりました。はい、「国家は私たちを支援している」とあなたは言い、それを拒否しませんが、それは国家の問題ではないと考えるのですね)

そうです。

(では、だれの問題ですか。市や県がありますが、それらはすべて公的制度です。他には?)

たとえ個人でも、絆は自然に生まれます。結局のところ、それは欠如に直面した人々のつながりにです。アソシエーションでさえありません。それは、口コミで協力して、するべきことをする人々です。その人たちに「人を泊めることができますか」とたとえば一ヶ月のような一定の期間、泊めてくれる家をさがしている家族のために問い合わせるのです。

(あなたが電話をするのですか)

はい、ですからこれはひとりひとりの問題です。私はこれはみんなの問題だと思うのです。連帯というのは、これはすべての人に関係する問題だと思うのです。

(では、なぜ人々はそれが自分の問題だと思わないのでしょうか)

おっしゃる意味がわかりません。

(あなたも良くご存じのように、近所の人々は「わたしは連帯したいけれど、でもなぜ私の家の隣に彼らを連れて来るのか?」と言います。ではどうやって本当に連帯する人々を理解できるのか? あなたの所に寄付する人々も、働きに来る人々もたぶんいるでしょう)

はい、もちろんヴォランティアとして働く人々がいます。

ブーエルクメンさんは、個人間に生まれる連帯について語り、質問者のアムシュさんは連帯の社会制度について語る。ここにも彼女の現実性、具体的な現実への関心の強さを感じる。

さらに質問は、どのように個人に連帯が生まれるのかというヴォランティアのテーマに繋がってくる。AIDAの活動報告書(AIDA, 2014)によれば、ブーエルクメンさんがインタビューで述べたと同様、約40名のヴォランティアおり⁹⁾、いくつかのタイプがあるという。停年退職した人々、学生、AIDAの利用者でありヴォランティアとしても働く人の3つのタイプが上げられている。AIDAの活動において、ヴォランティアは重要な位置を占めており、

彼らとうまく連携できるように、さまざまなことがなされている。ひとつは、2012年に『ヴォランティア手帳』を作成して、AIDAのヴォランティア活動に必要な難民申請の知識、サービスの内容がまとめられている。ヴォランティアは、フランス・ボランティア協会 France Benevolat やリール政治学院 l'Institut d'Etudes Politiques de Lille などから紹介されて、受け入れられている。ここから紹介される学生ヴォランティアは、AIDAで経験を積んで、就職に備えようとしている。AIDAでは、職員とヴォランティア、ヴォランティア間のコミュニケーションを深めるために、いくつかのイベントを企画、実行している。新年の食事会。フットサルなどのスポーツ。夏のハイキングなどである (AIDA, 2014, p.8)。

(彼らは停年退職したから来るのでしょうか。誰かを助ける必要があるから来るのでしょうか)

彼らが最初に来たとき、私はいつもそのことを考えます。最初から、ヴォランティアにきた人々が私たちの所でなにを求めているのかを見極めなければなりません。最初の面接でヴォランティアの人が何を求めているのかを見極めなければなりません。つまり、停年退職した人なら、彼らには人のために使える時間があります。また、ヴォランティアの中には信仰の問題として、来ている人もいます。受け付けにヴォランティアの女性がひとりいますが、彼女は修道女です。つまり、隣人を助けるという問題です。大学を出たばかりの若いヴォランティアがいますが、彼らは仕事をさがしており、学んだことの価値を高めよう、他のことも学ぼうとしているのです。だいたい、こんなヴォランティアのタイプがあります。最後に、避けたいのは、孤独で、友情を求めてくるヴォランティアです。私たちにはこれには応えることができません。この人たちは、一般的に1時間のヴォランティアのあとで、2時間、私と会う必要があります。ですから、私にはその力がありませんし、私は他で必要とされています。ですから、もっと閉鎖的で、もっと穏やかな組織を紹介します。そこではもっと頻繁につながりを確認できる会合があります。ですから、私は、最初からヴォランティアの求めていることを見極めることが重要だということです。

(次にワゼム [他の組織とのつながり] について質問します。市役所は支援してくれますか)

応じれば、きちんと。

(あなたを私たちに紹介してくれた都市政策 (Politique de la Ville) のプロジェクトマネージャは)

はい。

(この町で、あなたが一緒に協力して働いている人は他にいますか)

もしあげてよいなら、私たちが買い物にゆくお店です。

(お店とは、何か特別な関係がありますか、それとも顧客ですか)

私たちは顧客です。

(では、アソシエーションは?)

文化と世代 Culture et Génération というアソシエーションがありました。

(それは、文化について活動しているんですか)

はい、世代間の文化についてです。かれらは急にやって来て、私たちは会合を持って、でもそれだけです。

(では、ちょっとまとめてみます。7人の職員、35人のヴォランティアが、難民申請者を夜の宿泊を除いて、生活のあらゆる部分について彼らを助けようとしているんですね。食べ物、荷物、アルバイトのための教育。休憩の場所も、遊び場も、洗濯場までありますね。そして、宿泊については、あなた方が、他に声を掛けるんですね)

115番に電話をします。

(115?)

はい。

(それはなんですか)

無料の電話で、これもアソシエーションです。あらゆる提供と要求をまとめて、人々の配置管理をしています。

(サミュソシアル SAMU Social⁽¹⁰⁾ ですか?)

そうです。

ブーエルクメンさんは、他の組織との連携についてはあまり積極的に答えない。むしろ、自然発生的な、難民支援活動以外の、近所の人々の支援活動について述べ始める。

もうひとつ付け加えたいことがあります。この町の住民の関係で。彼らとの関係で。夫婦間暴力を扱う担当が私たちの中にあります。すでに町の人を受け入れています。

(それはアソシエーション活動ではないんですか)

いいえ、ぜんぜん。彼らはでもソーシャル・ワーカーに会いたいと思っているのです。

(かれらがあなたたちに会いにくるんですか)

担当者の所には、近所の男性が来て「私の孫に哲学の宿題があるのですが、私には全然わかりません。助けてくれませんか?」これは、「私には、娘に説明できません。どうしたらよいでしょう?」という人々がやってくるんです。

(面白いですね。どのように彼らはあなたたちを知ったのだと思いますか。たんに前を通りかかってですか?)

それは、いつも口コミです。

(さっき蛇の [現代芸術がおいてある] 広場で、ジュスティス通りを歩き始めるときに、

ゆき子さんに「ちょっと待って、58番地、それとも60番地？」と言ったら、通りかかったある男性が「AIDAなら、まっすぐですよ」と(笑)、教えてくれたので、ゆき子さんに「有名だな！」と言ったのです)

はい、私たちは有名です。(炊き出しの)食事のときに来てくだされば、(食堂の前の)行列は、すごいですよ。

(来ましょう)

(みなさんの労働時間は、どのようになっていますか)

8時半始まりです。

(みんなですか)

はい、8時半です。コリーヌは9時です。なぜなら、彼女は週35時間労働なので。8時半から17時、あるいは8時半から18時、または8時半から16時。人によって変わります。

(職員とヴォランティアの関係はどうなっていますか)

とても良好です。

(でも、他には?) (笑)

とても良い関係だと思います。というのは、私は彼らをどうしたら尊重できるか考えているので。

(35人のヴォランティアは長い間いる人たちですか)

ある人たちはそうです。2年、3年前からのヴォランティアもいます。

(2,3年ですね。彼らは、自分たちのヴォランティア活動を配分しているのですか)

はい、受け入れる日、時間はいつも決まっています。午前はヴォランティアが2人、午後ヴォランティア2人です。

(さっき、あなたと話をした若い女性は、ヴォランティアですか)

その通りです。2人のヴォランティアの1人です。私にとって2人を尊重するというのは、ありがたうなどということもですが、受け入れ、難民申請手続、組織の歴史、運動の歴史にかんして彼らに、定期的に知識を提示することによって行われるのだと思います。私はいつも「尊重すること、それは情報を与えること」だと言っています。彼らは何をしているのか、彼らは知らなければなりません。そして、たとえば受け付けやフランス語講座などの仕事についていろいろできるようにしなければなりません。たとえば、彼らには、『ヴォランティア手帳』を渡しているのですが、業務のすべての細々とした規則が載っています。

(こちらは、アソシエーションですが、総会はありますか)

はいはいはい。もちろんです。

(誰が、代表ですか。

ジャック

(停年退職した人ですか)

はい。

グラジェオン Glageon⁽¹¹⁾ のエマウスの責任者でした。

(7人の職員がいらっしゃいますが、かれらの職務分担はどうなっているのですか)

社会復帰訓練士，ソーシャル・ワーカー，法律家，週末の調理師，平日の調理師，そして私です。

(定期的にくる看護師，心理学者がいるということでしたが，彼らは?)

これは(他の)組織とのパートナー契約によるものです。

2-2-4 スピリチュエルなアンガージュマン

アンガージュマン(参加)とは、サルトルらの実存主義文学とともに日本に紹介された観念である。政治、社会、思想上の対立、抗争に際して自分の立場を明確にし、発言や行動の結果に対する責任を引き受ける態度をいう。ただ、日常的なフランス語ではもっと広い意味で遣われており、このインタビューでは社会的活動に身を投じる誓約 engagement, もっと日本語に引きつけて言えば、「なぜ、その活動に参加するのか」といった意味で用いられている。抽象的ではあるが、インタビューのテーマに沿って「連帯」に続いて、「アンガージュマン」についても質問した。

(ところで、アンガージュマンについて、この言葉をどのように理解しますか)

難しい質問ですね。

(ずっと昔から、行為の定義として、あなたのような方は「かれらは、使命(召命)vocationがある」といわれてきました)

神の召し出しがあった!

(そうそれです)

わたしは、そういうほうが単純で好きです。でも、私のアンジェージュマンの土台はもっとスピリチュエル spirituelle です。

つまり、不正義の観念が、とても幼いころに私の中に生じました。最初から「なぜ、私にはあるのに、他の人にはないのか」「なぜ、私はここに、こういう家族のもと、こういう両親のもとに生まれたのか」と、最初から思っていました。私の最初の活動は15歳でした。

孤児院でした。トルコのイスタンブールに住んでいて、「ヴォランティアがしたい」といって、夏の3ヶ月自然にその孤児院に行きました。

(不正義, そして使命の観念, それは押さえられないものでしたか)

押さえられないもので, そして奉仕を始めました。たとえば, 助けるという言葉が, 私は我慢できません。私には, 助けるという言葉の後ろに, 優越の問題があります。他人より上に自分をおいているので。ですから, 人といるとき, 話をするとき, いつでも「なんでも申し付けてください」といいます。同僚たちが「助けましょうか」といつているのを聞くと, 違う「私は, あなたと一緒にいるためにここにいます。なんでも申し付けてください。一緒に前に進みましょう。でも, 私はあなたの上にいるわけではありません」と思います。

(あなたはご自分を上に置かないのですね。「使命 vocation」という言葉について続けましょう。「使命 vocation」には批判というものはありません。あなたにとってアンガージュマンはもう十分ですか。それとも, アンガージュマンにも自分のしていることに対して, 批判的がともなうのでしょうか)

ああ, 面白いです。こんなふう考えたことはありません。たぶん, そうなんだと思います。

(あなたのアンガージュマンは限られています。あなたの家族生活によってそれにも関わらず, ある時間に, いろいろな問題が起きます。たとえばあなたはそれに合わせられますか)

はい, [仕事] 20時, 21時に終わることもあります。ちょうど良く終えるようにするために, 週のうち1日は子どもを学校に迎えに行く約束をしています。そうしなければ, 限界を超えてしまいます。木曜日だけは, 自分の終業時刻を尊重しています。

ピエール神父の創設したエマウスは, その活動は世俗的だが, やはりカトリックの影響は強い。エマウスの下で設立された AIDA も世俗的なアソシエーションとして活動しているが, 当然, カトリックの影響は強いと思われる。ここでは, あえて使命(召命) vocation という宗教的な表現を使ってアンガージュマンについて質問している。ブーエルクメンさんは, 自分のアンガージュマンにはスピリチュエルな背景があると答えている。特定の宗教を超えた霊的な背景から自分のアンガージュマンを説明している。しかし, その社会的な活動は, 意識的に時間を限定して行っているという。

2-3-5 難民申請者の状況

(職員についてですが, こちらでは長い間働いていますか)

そうです。モモは8年です。

(モモは雇われたんですね。彼は自身は, 難民申請の過程を経験しなかったのですか)

しました。彼は不法滞在でした。

彼と知り合ったとき、彼はヴォランティアで料理をしていました。

(不法滞在だったのですね。どこの国から来たのですか)

アルジェリアです。

(暗黒の10年⁽¹²⁾と呼ばれる時代に来たのですか)

いいえ、つまり彼の祖母がすでにここで生まれ、再び渡ったのです。つまり、1970年代に彼はここにいて、急にアルジェリアに渡り、いろいろあって、祖父母の代からフランスにいるのですから、フランスが彼の国なのです。

(難民申請者の状況との関連では、近年どんな印象をおもちですか。同じタイプの人々があなたのところに来ていますか。それとも変化がありますか。男性が多いですか、それとも女性ですか)

どんどん女性が増えています。

(どこから、増えているのですか。シリアから?)

シリアについては、うちに通ってくるのは2家族あります。

(ここで、いちばん多いのはマグレブ出身ですか)

いちばんではありません。

(いちばんはなにですか)

ブラック・アフリカのギニアです。

(あぁ、ギニアがいちばん多いのですか。驚きですね)

ルールには、大きなギニア人のコミュニティがあります。ほんとうにおおきいです。ルールーコナクリのつながりは、ちょっとバマコーパリのつながりに匹敵すると思います。それは、県庁の統計にかんするものではありませんが、かれらは大きなコミュニティになっていると思います。ブラック・アフリカ。グルジアも多いです。

(近年、大きな変化がありましたか。家族がいると仰っていましたが)

年に連れてというものではなく、期間により多数の到着者があります。私たちは「さぁ、国境が開かれたわ」と言います。ほんとうにパンと音がするような気がします。1週間、2週間、3週間、これからモンゴルから家族が到着するのを見るでしょう。

(こちらに来ている人々は、長い間ご存じなんですか)

はい、平均1, 2年です。それが手続きの平均時間です。8年前から知っている人もいますが。

(一般的な規則では、手続きは、なかなか受け入れられませんが、失敗で終わることもしばしばだと思いますが、そのときはどうなるのですか)

難民申請のあと、もし新しい要件があったら滞在資格申請や県庁での説明をやり直すことができます。私たちは、滞在資格正規化の委員会に参加しています。そこでは、正規

化の書類を提出することができます。この人は職業生活に完璧に入っており、仕事を見つけた。といった要件を加えて。

(たとえば、不法滞在であっても？あ、難民申請者としてですね)

たそうでもです。今朝、私はある男性を受け入れたのですが、カレフル・シティ・スーパーのレジ係の訓練を終えてきました。

(不法滞在で？ カレフル・シティですか？)

意欲的です。

(いいえ、でも雇い主は)

はい、罰金を受けますね。

(うまく行くんですか)

わかりません。

(ホテルなど、全部そんなかんじですね。事情が分かってきました。1, 2年かかるか、いなくなるか)

彼らは頑張り続け、私たちが正規化の書類をだそうとします。2年は十分ではありません。なぜなら、2, 3年の間に、人生においては、子どもを持ったり、だれかに出会ったり、結婚したりします。

(むしろそのときの状況ですね)

そうです。

(難民申請とは)

つまり、生活にかんする新しい要件です。

(滞在証の申請？)

はい、1年の。

(1年？ そして1年後、もし彼がそれを獲得したら、10年の正規化を申請できるのですか)

はい、でも手続きが必要です。1年の滞在許可証を5回受け取る必要があります。

(申請を拒否されて、あなたのところに来なくなった人が、どうなったと思いますか)

難民申請する地方を変えていると思います。難民申請を拒否されるとフランス領土を立ち退く義務があるので、「移動する」と彼らは考えます。リールは監視が多いのです。ここは、国境警察がまさに不法滞在者を見つける小さな町なのです。つまり、通りの端に出てきさえすれば、不法滞在を見つけることができるのです。毎月彼らは数を数えています。パリはもっと監視が緩いです。

(ジュール・ゲッド通りは不法滞在者が多いですか。結局、難民申請者は、あなたにとって滞在資格を持っているひとですか)

彼らはそれを待っているひとです。

(彼らは、身分証明書(滞在資格)を持っていますか)

はい、ジュール・ゲッド通りですか。

(「不法滞在者」といった場合、それは誰ですか？ 手続きをやりつくした人々ですか)

そうです。以前には持っていて、もう持っていない人です。

(女性がひとりで、支援を求めてここに来ることはありますか)

はい、たくさんあります。

(世界中からですか)

はい、込み入った事情を抱えて、妊娠している場合がしばしばです。

(責任者になられた2007年から今日まで、7,8年ですが、ここに来る人々に大きな変化はありますか)

あまりないように見えます。同じような申請者、同じような経緯です。

(あなたにとって、なにがいちばん気になりますか。申請者たちは政治的文脈との関連が強いのか、暴力か、経済的状況か)

経済的、そしてまた政治的。彼らが訴えを文書にするのを手伝っている、彼らが迫害を受けて、あるいは迫害のリスクがあって逃げて来たのはわかります。迫害の事実とリスク、両方もあります。

(人々は、リールの周辺に留まりたいと思っていますか、それともどこかへ行こうとしているのですか)

滞在資格を手に入れると、一般的には留まります。難民申請を却下された人々は、僅かの光を見て、また働ける可能性がないと、パリに行くのではないかと思います。というのは、仕事を見つけるのがもっと簡単だからです。でも、リールとのつながりは、ずっと維持しようとしています。というのも私たちが行っているような業務はノール県、リールにしかないからです。正規化の書類を提出する県庁との出会いです。

(なぜ、そうなのですか)

それは、外国人の受け入れ、受け入れの伝統です。だから、つながりがあるのです。

(こちらに来る人々は、おもにフランス語を話す人々ですか)

全部では、ありません。

(英語を話す人もいますか)

はい、英語を話す人も。

(英語を話す人は、フランスに留まるつもりではなくて、滞在許可を得るのが簡単だという理由でフランスに関心があるのではないのでしょうか)

イギリスに行くつもりだったのですが、でも、冒さなければならない危険を考えて、リールに留まり、「仕方がない、リールで難民申請しよう」と思った人もいます。それが、

彼らの私に言ったことです。私は、ジンバブエからの人に2回、2人に会いました。あるとき「なぜ、リールに2人いるのかしら？」と思いました。結局、故国で歴史学の教授だった45歳の男性なのですが、「いや、トラックの後にへばりつくなんて考えられない。こんなふうに国境を越えられない。仕方がないと思いました。フランスで申請して、それから試してみようと思いました」と、彼は言っていました。

(あなたはトルコ語を話しますが、トルコから来る人、トルコ人やクルド人はいますか) 少しだけ。

(より古典的移民、経済的抑圧のせいですか)

経済的です。結局、それはとても例外的です。というのもトルコ人はコミュニティに閉じこもるからです。

(ここのトルコ・コミュニティは大きいですか)

あんまり。コミュニティのなかで生活している場合、4,5年経ってある日、私に会いに来ます。「こんにちは。2009年にフランスにいらしたんですね。どうやって？ハンガリー発行のシュンゲンビザですか？」「は？」「では、なにか手続きをしましたか。県庁に行きましたか」「いいえ」「いまは、2015年ですよ、あなた。6年たっているんですよ」、質問をします。「いったい今朝なにがおきたんですか。太陽のせいですか？『さあ、滞在許可をなんとかしよう』と今朝おもったのはなんのせいですか？6年間、社会保障もなく、フランス語のレッスンを受けることもなく、過ごしていたのに」

(まさに)

(そろそろ5時なので最後の質問です)

アゼルバイジャンやトルクメニスタンから来る人々もいます。

(かれらと、トルコ語ではなすのですか)

トルコ語で、そうです。

前述したようにリールには外国人を支援するアソシエーションが例外的な滞在正規化を求める外国人行政状況再審査県諮問委員会が置かれている。国境に位置するノール県は、とりわけ難民申請者の支援が分厚いといえる。ブーエルクメンさんの語りは、リールの難民申請者支援の状況についての資料として興味深い。

3 まとめにかえて

ブーエルクメンさんのインタビュー文字起こしを分析すると、彼女の活動の特徴として、まず、人への包括的な関心、現実性と具体性への関心、活動の時間と空間の限定が指摘できる。

彼女は法律家ではあるが法的な側面に限った難民支援には、学生時代から関心が持てなかった。人の生活全体を視野に入れ、将来の安定も目指す仕事をしたいと考えて AIDA に就職した。歴史のある全国組織であるパリの CIMADE の仕事より、法律家としての仕事に限られないリールの小さな団体の活動を選んだ。支援対象者だけでなく、ともに働く同僚の生活、将来の安定にも気を配っている。

彼女が面白いと思う活動は、人との交流の中から見いだされ、交流の中で実現しようとする。端的に現れているのは、世界の朝食という催しである。近所の人々との緊張関係を難民申請者と隣人との出会いの場を設定することによって、ほぐそうとして大成功した企画である。具体的、日常的な問題に対して意識が向けられており、関わる人々の交流を通して解決される。相手の主体性の尊重と主体性を持った人々との交流を通して、彼女の目指す支援の理想が実現される。それは、AIDA の活動報告書 (AIDA, 2014) で強調されている現場性にも通じ、個人間に生成する制度化されない連帯への関心と繋がっている。

しかし、彼女はその社会的活動を時間的、空間的に限定しようとする。AIDA の活動は、AIDA という職場に限り、そこから離れる時間と空間を持つようとする。終業時間の尊重、職場と自宅の環境的な距離などで、活動を限定している。

ブーエルクメンさんは活動の現実的な場を重視し、支援の理想は具体的な人との交流の場で実現しようとしている。しかし、唯一抽象的で重要なものだったのが、スピリチュエルなアンガージュマンである。彼女は、自分の活動の動機を、特定の宗教を超えたスピリチュエルなものとしている。自分を越えた、どこから由来するか分からない自分の心に蔭かれたもの、「なぜ、私にはあるのに、他の人にはないのか」という不正義への疑問、不公正な現実への疑問が、アンガージュマンの理由である。彼女はそれをスピリチュエルなものと呼ぶ。

最後に、ノール・パドカレ地域圏は、中心性と周辺性を同時に帯びた両義的な地方である。その中心のリール市も両義的な町だが、ワゼム地区も同じように中心性と周辺性が共存する。リール市はフランスの貧しい田舎町と思われ、その中でも貧しく庶民的な地域のワゼムで、トルコからの留学生としてキャリアを出発した女性が、フランス市民として世界中からやってくる難民を支援している。このような両義性は非常に興味深い。2014 年 11 月から 2015 年 2 月にかけてのワゼム地区のアソシエーションへのインタビューの分析を、今後は、このような両義性と結びつけ、ワゼム地区のアソシエーション活動を明らかにしてゆきたい。

〈注〉

- (1) TGV のリールへの誘致については、1981 年から 1984 年までフランスの首相であり、1973 年から 2001 年までリール市長を務めた政治家ピエール・モーロワの働きが大きかったという。
- (2) リール第一大学のアブデル・アムシュ先生にリール市役所ワゼム地区担当のオリビエ・マリシェさんをご紹介頂き、2014 年 11 月下旬からワゼム地区のインタビュー調査を始めた。まず、2014 年 11 月 24 日にリール市役所ワゼム庁舎でオリビエ・マリシェさんにお会いした。マリシェさんは、都市政策 (Politique de la Ville) のプロジェクトマネージャである。都市政策は、フランスでは独特の意味を帯びており、リール市はホームページでその内容を次のように説明している。

困難な状況にある住民が地域から排除されることなく、リール市のその他の地域との格差が広がらないことを目標とする連帯と発展の政策である。政策の対象は、地域と住民の2つである(Ville de Lille)。都市政策は、リール市全体の発展計画の中で、地域住民やアソシエーションと連携しながら推進される。マリシェさんは午前中いっぱい、ワゼム地区の状況をレクチャーして下さり、インタビューするべき重要な社会的アソシエーションのリストを下された。本稿で紹介するAIDA (Aide et Insertion des Demandeurs d'Asile) は、その一つである。

- (3) エマウスは、「恵まれない人々のために、恵まれない人々とともに」活動する団体として知られるが、1949年ピエール神父がパリ近郊のヌイイ・プレザンスに家を買ひ、ホームレスを受け入れたことから始まった。エマウスという名前は、キリストが十字架に掛けられた後、悲嘆にくれて2人の弟子たちが歩いているとき、エルサレム近くのエマオ(エマウス)で未知の旅人と出会い道連れとなり、後でそれが復活したイエスとわかるという新約聖書の話しに拠っている。エマウスの活動は、やがて、廃品回収で収入を得て自立した共同体を営むようになる。1954年冬にピエール神父は家賃を払えずに家を追われて凍死した女性の状況を訴えて、フランス中に大きな反響を呼び起こし、エマウス運動は有名になった。ピエール神父は長い間フランス人にもっとも人気のある人物で、2007年に亡くなったときには、パリのノートルダム教会で国葬が営まれ、大統領以下政府要人、人種、宗教を超えて多くの人が参列した。カトリックの影響の強い運動だが、ピエール神父はエマウス運動の非宗教性を重視していた。2015年世界37カ国にその運動は広がっている。日本では蟻の会の北原怜子との出会いから、1956年ロベール・バラード宣教師が神戸エマウス(暁光会)を創立した(Emmaus international) (Emmaus Solidarite, 2015) (EMMAUS OSAKA CENTRE, 2015)。
- (4) 新しい難民申請の判断は、難民・無国籍者保護局(Office français de protection des réfugiés et des apatrides (OFPRA))の管理下で行われる。まず、庇護申請者受入れセンター(Centre d'accueil de demandeurs d'asile (CADA))で申請が判断され、申請が却下された場合の再請求は、庇護権全国裁判所(Cour nationale du droit d'asile (CNDA))において判断が下される[労働政策研究・研修機構, 2015] (Direction de l'information légale et administrative, 2015)。
- (5) Emmaüs, Ligue des droits de l'Homme, Secours catholique, CIMADE, MRAP, AIDA, Voix de Nanas, Parce que des hommes y vivent, SAFFIAなどのアソシエーションが参加している(Préfet du Nord, 2013)。
- (6) 文字起こしは、文頭を下げて引用の形式で示す。文字起こしの「私」は、原則としてブーエルクメンさんを示す。文字起こしの間にある行間は、質問の省略などの編集を行っている。カッコ[]内は、文意を明確にするために私が付け加えた。丸カッコ()内は、質問者の発言を示す。
- (7) 参入契約 contrat d'insertion とは、日本の生活保護に似た社会参入最低所得手当(RMI)を受け取っている者と地方公共団体担当部局の間で結ばれる契約である。参入契約は、2010年まで存在した。RMI受給者が社会的自立を果たすために必要な計画を定める契約である。社会的自立を果たすための日程、地方公共団体が提供できる支援内容などが盛り込まれている。事業主は、参入契約を結んでいる者を援助契約に基づいて雇用すると、国から一定の財政援助を与えられた[服部有希, 2012, ページ:36]。
- (8) このあと、ブーエルクメンさんと質問者の一人であるアムシュさんと「連帯 solidarité」の範囲をめぐって質問と答えがかみ合わない。文字起こしの整理では、アムシュさんの質問と私の質問の区別をしていないが、連帯についての質問はアムシュさんのものである。アムシュさんはフランス的な国家の制度としての「連帯」の観念について語り、ブーエルクメンさんは、現実の場で生まれている「連帯」について答える。質問者が自分の答えを押しつけているように見えるが、アムシュさんはフランス市民社会の「連帯」観を述べており、私には興味深かった。
- (9) インタビューでブーエルクメンさんは、35人と言っている。
- (10) 1993年、グザビエ・エマニュエリによって、パリ市役所の支援を受けて設立された団体。サ

ミュ SAMU とは、緊急医療救助サービスの意味で日本の 119 番にあたる。ソーシャル Social とは社会であり、緊急救助サービスを、社会的に排除された路上の人々に対して行おうとするもので、115 番の電話に掛けて来た人々の必要に応じて、車などを差し向けて、その日の宿泊先などを提供する (Samusocial)。

(11) ノール県南東部に位置する都市。リールから約 90 キロ。

(12) 1991-2002 年のアルジェリア内戦。

参考文献

- AIDA. (2014). *Rapport d'activité 2013*. Lille France: Association AIDA.
- Cette France-là. (s.d.). *Daniel Canepa*. Consulté le 11 8, 2015, sur <http://www.cettefrancela.net/volume-1/recits-2/article/daniel-canepa>
- Direction de l'information légale et administrative. (2015, 7 30). *Loi du 29 juillet 2015 relative à la réforme du droit d'asile (vie publique)*. Consulté le 11 8, 2015, sur <http://www.vie-publique.fr/actualite/panorama/texte-discussion/projet-loi-relatif-reforme-asile.html>
- DUTHOIT, B. (2010, 5 4). Ligue des droits de l'homme, Cimade et MRAP dénoncent la baisse des régularisations. *La Voix du Nord*. Consulté le 11 23, 2015, sur http://www.lavoixdunord.fr/Locales/Metropole_Lilloise/actualite/Secteur_Metropole_Lilloise/2010/05/04/article_ligue-des-droits-de-l-homme-cimade-et-mr.shtml
- Emmaus international. (s.d.). Emmaus international. Consulté le 11 26 2015 sur Emmaus international: <http://www.emmaus-international.org/fr/?lang=english>
- EMMAUS OSAKA CENTRE. (2015 年 4 月 8 日). ロベール・バラード. 参照日: 2015 年 11 月 26 日, 参照先: EMMAUS OSAKA CENTRE: <http://www.gyokokai.org/index.php?%A5%ED%A5%D9%A1%BC%A5%EB%A1%A6%A5%D0%A5%E9%A1%BC%A5%C9>
- Emmaus Solidarite. (2015). Emmaus Solidarite nos valeurs. Consulté le 11 26 2015, sur Emmaus Solidarite: <https://www.emmaus-solidarite.org/nos-valeurs/>
- INSEE. (2015, 9 3). *Taux de chômage au sens du BIT-Ensemble-France métropolitaine-Données CVS*. Consulté le 11 30, 2015, sur <http://www.bdm.insee.fr/bdm2/affichageSeries.action?idbank=001688526 &bouton=OK&codeGroupe=1533>
- INSEE. (2015, 10 12). *Taux de chômage localisé par région-Nord-Pas-de-Calais*. Consulté le 11 30, 2015, sur <http://www.insee.fr/fr/bases-de-donnees/bsweb/serie.asp?idbank=001515850>
- Le préfet installe sa commission sans-papiers. (2007, 9 26). *20 minutes*. Récupéré sur <http://www.20minutes.fr/lille/183700-20070926-prefet-installe-commission-sans-papiers>
- Lecomte, M., & Benoit, W. (2015, juin). Une pauvreté plus marquée au coeur des pôles urbains. *Insee Analyses Nord-Pas-de-Calais* (16).
- Préfet du Nord. (2013, 1 11). *Communiqué de press MOUVEMENT DU COMITE DES SANS-PAPIERS: APRES LA CODRESE DU 10 JANVIER, LE PREFET PROPOSE UNE SORTIE DE CRISE*. Consulté le 11 23, 2015, sur Les services de l'État dans le Nord: http://www.nord.gouv.fr/content/download/9385/57651/file/130111_csp_proposition_sortie_crise.pdf
- Samusocial. (s.d.). *Samusocial de Paris*. Consulté le 11 30, 2015, sur Samusocial de Paris: <https://www.samusocial.paris>
- Ville de Lille. (s.d.). *Ville de Lille, Accueil, Lille Solidaire, Politique de la Ville*. Consulté le 9 22, 2015, sur <http://www.lille.fr/cms/accueil/lille-solidaire/Politique-de-la-ville>
- 高橋伸夫・手塚章. (2003 年). 「リール大都市圏の構造変化と発展戦略」高橋伸夫・手塚章・村山祐司・ジャンロベール=ピット編, 『EU 統合化におけるフランスの地方中心都市——リヨン・リール・トゥールーズ——』(ページ: 67-110). 古今書院.

- 服部有希. (2012年9月). 「フランスにおける最低所得保障制度改革 — フランスにおける最低所得保障制度改革 —」『外国の立法』(253), 33-85.
- 労働政策研究・研修機構. (2015年1月). 主要国の外国人労働者受入れ動向：フランス（フォーカス：2015年1月）. 参照日：2015年11月8日, 参照先：http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/france.html

“Spiritual Engagement”:
Social Commitment Expressed through Individual Social Activism
and the Activities of an Association for Asylum Seekers
in Wazemmes in Lille

Yukiko Tsujiyama

In this essay, the life history of the leader, Ebru BUE ERKMEN, of AIDA (Aide et Insertion des Demandeurs d’Asile) is analyzed. AIDA is an association that works to provide support for asylum seekers in Lille, France. Lille is on the frontier of France and Belgium and it is also at the center of Europe. By considering the life history of the leader of this group as divulged in a personal interview, we can see many ways that active support for refugees has been provided in Lille. It is also possible to understand the group leader’s focus in life and her commitment to a form of solidarity that resists the institutional and which encapsulates the “Spiritual Engagement,” the personal social commitment, that she espouses herself.